



各賞受賞

「平成 25 年度日本エネルギー学会 学会賞(技術部門)」を受賞

日本エネルギー学会において「高収率でプロピレンを生産する次世代 FCC (HS - FCC) プロセスの実証の成功」が評価され、平成 25 年度学会賞 (技術部門) を受賞した。当該学会賞は、エネルギーに関する学術、技術分野において、特に顕著な業績・成果を挙げた個人または団体を表彰するものである。HS - FCC (高過酷度流動接触分解) は、従来型 FCC (流動接触分解) と異なり、重力に逆らわないダウンフローを採用することで反応時間が均一になり、プロピレン等を高収率で生産できる画期的な技術であり、当社水島製油所に処理量 3,000 バレル/日の実証化装置を建設し、2011 年 5 月から実証運転を行ってきた実績が高く評価され、今回の受賞となった。



左から藤山燃料研究所 CRI・触媒 GM (当時)、四方路技術部技術企画 3GM (当時)



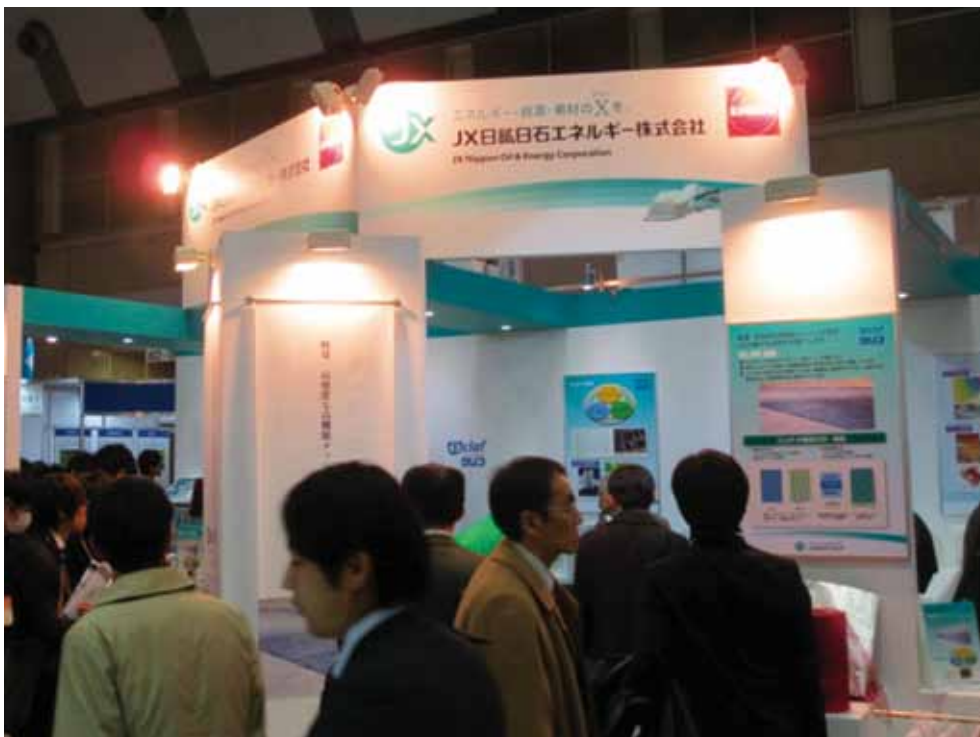
新機能性材料展2014に出展

1月29日～31日、東京ビッグサイトで新機能性材料展が開催され、当社はワリフ・ミライフ・コンヴェッドネットを使用した各種素材を出展した。

新機能性材料展は年1回開催されている高機能材料のトレードショーで、材料・素材・機能紙・添加剤・箔・フィルムに関する最新技術・製品・研究成果が一堂に集結し、今回は4万8千人の来場者があった。

現在、特殊不織布販売グループでは、当社の不織布を利用した複合素材の販売に力を入れており、今回の出展においても各種複合品を展示し、来場者の関心を惹く事により多くの新規開発テーマを集める事ができた。又、今回ブースの一部で、機能化学品カンパニーが開発を進めているナノイプリントを併設展示し、多くの来場者の注目を集めた。

(機能化学品カンパニー 不織布事業ユニット 不織布セールス&マーケティンググループ 三嶋 朋彦)



当社出展ブース



均一粒径架橋アクリルポリマー微粒子「ENEOSユニパウダー[®]」の本格販売

2014年2月、当社は機能性溶剤技術で培った乳化技術を応用した架橋アクリルポリマー微粒子「ENEOSユニパウダー[®]」を事業化し、本格販売を開始した。ポリマー微粒子は粒径が1~100 μm 程度の高分子粉体であり、機能性添加剤として、液晶ディスプレイ用光学部材の光拡散剤、各種フィルムのアンチブロッキング剤、塗料の艶消し剤、化粧品など様々な用途に使用されている。

ENEOSユニパウダー[®]の最大の特徴は、独自の技術により実現した「均一な粒径」である。一般のポリマー微粒子と比較して非常にシャープな粒径分布を有するため、光学部材の光学特性向上、アンチブロッキング剤としての添加量削減といった効果が得られる。

また、粒径の均一性を維持したまま、平均粒径や屈折率、柔軟性等の物性制御が可能であり、様々な顧客ニーズに対応した最適な品質を実現している。さらに、耐溶剤性、溶剤分散性、耐熱性についても優れた特性を持ち、各種コーティングプロセスや押出成形等の高温加工プロセスに適応するため、幅広い用途に展開可能である。これらの特徴を活かし、国内外の顧客ニーズに対応することで販売拡大を図っていく。

(機能化学品カンパニー フィルム事業ユニット ポリマー微粒子事業グループ 新保 康行)

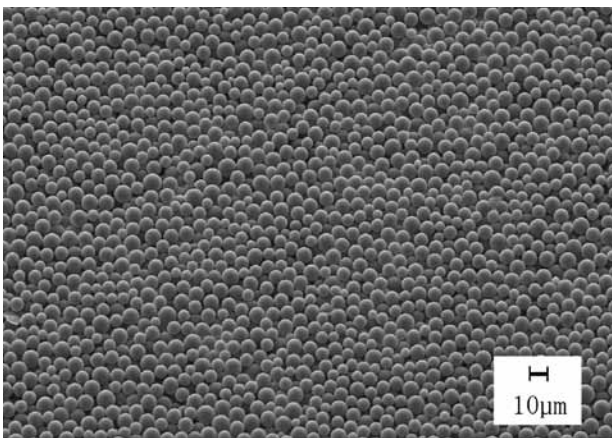


図1 ENEOSユニパウダー[®]の電子顕微鏡写真

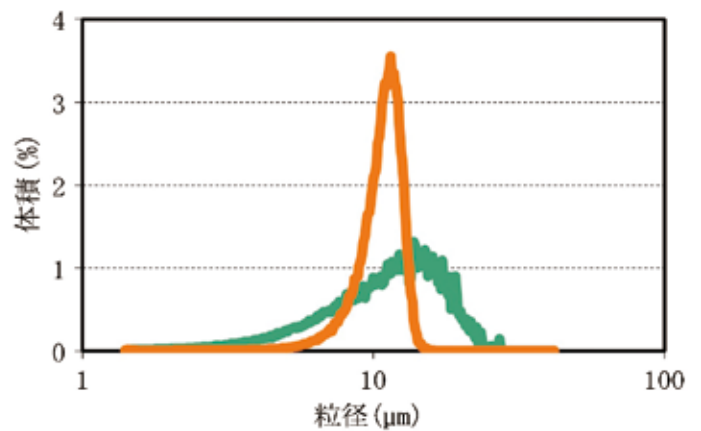


図2 ENEOSユニパウダー[®] (橙)と一般ポリマー微粒子 (緑)の粒径分布

表1 ENEOSユニパウダー[®]の標準グレード

項目 単位	材質 —	平均粒径 μm	真比重 —	屈折率 —	熱分解温度 $^{\circ}\text{C}$
NMB-0220C	架橋PMMA	2	1.20	1.49	340
NMB-0320C		3			
NMB-0520C		5			
NMB-1020C		10			
NMB-1520C		15			
NMB-2020C		20			
NMB-3020C		30			



JX日鉱日石エネルギーにおける メガソーラー発電事業

2012年7月、再生可能エネルギーの固定価格買取制度が施行されたことを踏まえ、当社は自社グループ遊休地を活用したメガソーラー発電事業に取り組んでいる。

既に仙台製油所（1メガワット）、下松事業所（1.8メガワット）、土浦油槽所跡地（2メガワット）にて送電を開始しており、また秋田油槽所（4メガワット）、いわき油槽所跡地（1メガワット）、下松製油所跡地（2メガワット）、沖縄石油基地（12メガワット）にて現在建設工事を進めている。

当社メガソーラーでは、施工方法として「置き基礎工法」を採用している。

置き基礎工法は、地表面設置のコンクリート製基礎の自重で太陽光モジュールおよび架台を支持するため、大規模掘削等が不要となる工法である。

また、同工法は一般的な杭打ち工法よりも設備の移設、撤去が容易であるため、将来的な土地活用の自由度が向上するという利点もある。

当社は、今後も顧客のニーズに合わせた様々なエネルギーを提供する「エネルギー変換企業」として、持続的な社会の実現に貢献して行く。

（新エネルギー事業部 ESCO & ソーラーグループ 佐野 英一）



重油タンク跡地を利用した下松メガソーラー



掘削せず設置可能な置き基礎工法



かすみがうらメガソーラーの掘削 50cm
以内の電柱